

「サヨンの鐘」のサウンドスケープ：
リヨヘン社タイヤル族の音の記憶とアイデンティテ
イ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-06-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小西, 潤子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007341

「サヨンの鐘」のサウンドスケープ

—リヨヘン社タイヤル族の音の記憶とアイデンティティ—

The Soundscape of "Sayon's Bell":

The Memory of Sound and Identity of Atayal from Lejoxen

小西 潤子

Junko KONISHI

（平成 24 年 10 月 4 日受理）

はじめに

「ブン チャッ ブン チャッ」とゆったり刻む弦楽器のリズム、四七抜き長音階からなる跳躍進行のメロディ。渡辺はま子が和洋折衷の発声法で音と音の間をスライドさせて、「鐘は鳴る鳴る ああサヨン」とうたう《サヨンの鐘》（西條八十作詞、古賀政男作曲、渡辺2011）は、アジア的異国情緒あふれる典型的な戦前日本の歌である。サヨン（現在は莎韻、日本統治時代の小説では莎秧）という不思議な響きのする語は、南澳郷リヨヘン lejoxen（現在は流興、日本時代の文献には利與邊とも）で暮らしていた台湾原住民タイヤル族¹の少女の名前である。この歌のもととなった「サヨンの鐘」の物語はとて有名で、演劇、美術、文芸、紙芝居、映画、教科書にも採録された。この歌についても、豊富な研究資料があり（原田 2010）、他のジャンルも『「サヨンの鐘」関係資料集』（下村編 2007）に集大成されている。「サヨンの鐘」は、戦後リヨヘン社の人々が金岳社に移動した際に喪失された。しかし、1998年6月に南澳郷が莎韻記念公園に設置した「莎韻の鐘」は、現在観光スポットになっている。

にもかかわらず、少なくともその3人の老人にとって「サヨンの物語」は終わっていなかった。彼らは、初対面の私たちにいきなり流暢な日本語で「あれは、違うんです」とまくし立てたのである。2012年3月9日、台湾政治大学・張中復准教授の設定により、静岡大学人文学部・上利博規教授、大野旭教授とともに、台湾北東部の宜蘭県にある南澳郷金岳社区発展協会を訪問したときであった。彼らは、豊田ヤエ子（80歳）、豊田一之（76歳）、ナカヒラヒロコ（83歳）と日本名を名乗った。ヤエ子さんは、サヨンの長兄ユーカ・ンハロの長女、一之さんは次兄・バット・ハヨンの息子にあたる。「サヨンの鐘」のことすら知らなかった私は、何のことだかさっぱりわからなかった。

ヤエ子さんは、日本人からもらったという『民俗台湾』という古い雑誌のコピーを大切に持っていた（写真1、松山 1944）。この写真が、彼らの主張を理解する手掛かりのようであった。見ると、「乙女サヨン」と刻まれている部分が読める鐘、サヨ



写真1 長谷川総督贈呈の「サヨンの鐘」（松山1944）

ンの遭難現場、溪畔に立つ「遭難の碑」が、リヨヘン社の風景とともに写っていた。「あれ」というのが現在の「サヨンの鐘」とその場所を意味し、それが彼らの思っているものとは「違う」、と言いたいようであった。

1895年からの日本植民地支配下において、同化主義政策のもとに近代的教育制度が導入された。台湾人は、1906年頃には「東部の険しい山岳地帯と森林地帯で原住民が依然抵抗を続けている」（ピーティアー 1996, 103）「日本にとって望ましい方向に変容」（前掲書, 232）した。1930年代からは皇民化のもとで、統制と服従の強制が行われた。そして、「表面上忠実で法律を尊重する日本人」にされた台湾の人々は、自己のアイデンティティを失った（前掲書, 134-137）といわれている。「サヨンの鐘」物語は、日本側が日中事変後に戦力確保のため設立した「陸軍特別志願兵制度」を背景に、台湾原住民の「宣撫」のために利用された愛国美談として知られている。たとえば呉は、この物語の効果について1) 出征軍人応召の際、物語が悲壮感を引き立てたこと、2) 「滅私奉公」のサヨンが台湾原住民への啓蒙と教化の成功を物語ること、3) 「高砂族」の戦争動員のキャンペーンとなったことをあげている（呉 2008, 156-157）²。

だが、愛国美談化は、リヨヘンから離れた台北や日本で行われたことである。愛国美談化のプロセスにだけ目を向けていると、そのときリヨヘンの人々がサヨンの事件をどのように受けとめ、日本側が贈与した「サヨンの鐘」をどのように受け入れ、いかにして自分たちの文化のものとしていったのかは見えてこない。鐘である以上、鐘としての機能に注目することで、リヨヘンの人々にとっての「サヨンの鐘」を理解できるのではないだろうか。

そこで、本論ではサウンドスケープ論を援用して「サヨンの鐘」をとらえようと試みる。サウンドスケープ論は、1960年代末、人間と環境音との関係の重要性に気付いたカナダ人作曲家・マリー・シェーファーが提唱したものである。シェーファーは、それぞれの音が明瞭に聞き取れるハイファイな音環境と、音が過密なローファイな状態とを区別し、基調音（人の注意をひかない音）、信号音（人の注意をひく音）、標識音（共同体を象徴する音）という音のとらえ方を示した。そして、「どの音を残し、どの音を広め、どの増やしたいのか」にのっとったサウンドスケープ・デザインの可能性を追究した（シェーファー 1986, 21-23）。鐘の音はしばしば、単なる時報以上の宗教的な意味をもつ（谷村・中川, 2004, 5）。教会の鐘の音や寺院の梵鐘は、共同体の標識音としてそれぞれ個性的に響いてきた。長年を経て、鐘の音はその場所になくてもならないものとなり、共同体そのものを象徴するものになっている。ヤエ子さんにとっての「サヨンの鐘」は、リヨヘンそのものを象徴する音を発していたはずである。その音は、どのように響き、どのように聴かれていたのだろうか？

音そのものや当時リヨヘンの人々残した音の記録はないが、当時のリヨヘンの音環境を知る手掛かりとして、長尾和男の記録と小説（1943）³がある。長尾は、サヨンの事件の数年後（おそらく1942年）にリヨヘンを訪れて、関係者からの情報をもとに小説を書いた。また、その附録「リヨヘン探訪記」（長尾 1943, 125-178）には、リヨヘンまでの道中と滞在中に長尾が耳にした音が詳細に記されている。ヤエ子さん、一之さんのお名前（前掲, 542）や幼少だったヤエ子さん自身のことも描かれているし⁴、ヤエ子さんの先生にあたる松村ミヨ子さん（ラハ・モヘン。以下、日本名で表記）とも面会をしている。現地語の歌を複数書き留めていることから、長尾が現地の文化を尊重し、短い滞在期間ながらも信憑性のある情報を得たことがわかる。下村も、「サヨンの鐘」の実証的研究の上で、「リヨヘン探訪記」「サヨン・ハヨンに関する略年譜」がもっとも貴重な文献だと評価している（前掲, 646）。

サウンドスケープの分析に先立ち、サヨンの事件とそれに対する日本側の対応、その後の物語化について、『「サヨンの鐘」関係資料集』（下村編 2007）をもとに整理する。また、タイヤル族の人々の世界観を把握するために、サヨンの事件から30年後の李らによる民族誌（1963）を用いる。これは、南澳における戦後台湾の民族学調査結果として評価されており（黄編 2012）、金岳社発展協会や碧候国民小学の民族教育の資料としても用いられている。ヤエ子さんたちが中年層だった頃の記録として、事件当時の人々の世界観を振り返るのに適している。これらとともに、長尾が聴いた音の記述を分析することで、リヨヘンという場所とそこで暮らしていた人々の音空間とアイデンティティとの関係を明らかにしたい。言い換えると、本論は、ヤエ子さんたちの主張する「サヨンの鐘」の「違い」を音環境という側面から理解しようとするものである。

1. 研究対象と方法

1.1 サヨンの事件

「サヨンの鐘」の物語の舞台であるリヨヘンは、大濁川北溪支流のブシュワン bushwan 溪左岸からリヨヘン山中腹の海拔970メートルの台地に至る場所である。人々は、18世紀半ばピンスブカン pinsebekan から移動してきた。金岳村には、1915年旧ブター社より柑仔頭に移住した13戸のうち9戸、1942年タビヤハンから1戸移住してきたが、リヨヘンからは1958年45戸が最後の集団移住をしてきた。現在は、リヨヘンは廃村となっている。

次に、下村による『「サヨンの鐘」関係資料集解説』（2007）をもとに、サヨンの事件と鐘の建立の概要についてまとめる。サヨンとは、1922年旧台北州蘇澳郡リヨヘン社生まれのサヨン・ハヨンという実在した女性であった。事件は、1938年9月27日、サヨンがリヨヘン駐在所の警察官でもあり原住民のための教育所教員であった田北正記警手の下山を見送って、他のタイヤル族の若者と共に⁵荷物を搬送する際に起こった。17歳のサヨンは、南澳溪の南澳で仮木橋を通行中に足を滑らし、豪雨で増水した激流に墜落した。捜索により、サヨンが運んだトランク3個が見つかったが、遺体が発見されなかった。事件は2日後、『台湾日日新聞』の記事になった。

日本人教師の荷物運びを手伝った際に発生したこと、台風のさなかに出発しなければならなかったこと、遺体が発見されなかったことから、リヨヘン社の関係者や蘇澳郡の郡守、台北州知事らの同情を集めた。事件後、同年11月26日にリヨヘン社青年団葬が行われ、12月6日に藤田偵治郎・台北州知事がサヨンの墓参をした。また、翌年1月、山地巡回の折に再訪した藤田知事がサヨンを悼む歌を詠み、同10月に「サヨン乙女の碑」を建てた。さらに、1940年2月20日、台北市公会堂における皇軍慰問学芸会で、リヨヘン社青年団が事件にもとづく歌を披露した。長谷川清・第18代台湾総督がこれに感動し、愛国少女をたたえる鐘をリヨヘンに寄贈した。この話が広がり、サヨンの事件が愛国乙女「サヨンの鐘」物語となり、台北、日本へと知れ渡ったのである（以上、下村 2007, 637-639）。

なお、『理蕃の友』（警務局理蕃課 1941, 8）の記事では、〈サヨン少女を想う〉という歌をうたったのが「リヨヘン女子青年団員松村美代子」であり、長谷川総督が「理蕃課に命ぜられてその表彰方法を考究」し、「格好の『鐘』を選定」したとある。つまり、鐘を贈るという発想は理蕃課から出されたものらしい。また、総督公室で行われた表彰式にはサヨンの兄バット・ハヨン、リヨヘン女子青年団長・松本光子が出頭した。注目すべきは、その際の総督のこ

とばが「故人の篤行を永遠に伝えると共にサヨンを出したりヨヘン青年団員諸氏の修養の資とせられたく『サヨンの鐘』一個を贈る」と締めくくられていることである。すなわち、「サヨンの鐘」は、サヨンやその親族のためだけではなく、リヨヘン青年団に贈られたのであった。

1.2 「サヨンの鐘」物語の成立

サヨン事件および「サヨンの鐘」物語の流れを整理するために、下村作成の年表（2007, 648-651）をベースに時系列に沿ってまとめたものが、次の表1である。長尾の作品を除いて、「サヨンの鐘」関連作品は、日本人もしくはその影響を受けた台湾本国人の視点から創作された。つまり、タイヤル族の価値観を顧みず、当時の日本的な思想の影響が強かったり、物語性を重視していたりする。なお、下村は、国民学校教科書「サヨンの鐘」がもっとも史実に即した記述だとする⁶。以下では、紙数の都合により、作品化の口火を切った1941年7月の渡辺はま子による歌⁷と映画のシナリオのみを取り上げて紹介する。

《サヨンの鐘》の歌は、事件を淡々と語る歌詞と、四七抜き（ファとシの音を使わない）長音階による戦前日本の典型的な曲調からなる。渡辺はま子は、この旋律の動きをベースに巧みな装飾法を加えることで、異国情緒を感じさせるようにうたっている。つまり、事件から2年後に成立したこの歌は、リヨヘンやサヨンの文化的背景を知らない外部者が、「サヨンの鐘」物語に自らの感情を投影したものなのである。ところが、興味深いことに、時間の経過とともにこの歌は、文化の担い手の間で「自文化化」されていった。ヤエ子さんも一之さんもヒロコさんも、日本語版《サヨンの鐘》とその中国語版《月光小夜曲》を行事ごとにうたっており、最後まで完全に覚えている。南澳郷では、1936-37年頃から「旧習慣改善に依り古来の踊りは廃止」され、1940年代初めには「国民的情操を涵養するための踊りに改め」られた。当時中年以下の者は蕃歌（原住民の歌）を知らず、青年たちは蕃歌を嫌い「軍歌愛国歌」を「熱心に」うたったという（長尾 1943, 143-144）。日本語世代は、《サヨンの鐘》などの日本植民地時代の歌をアイデンティティのよりどころとしていったのである。

1943年の映画⁸のシナリオについては、事件の核心となる部分は結末で短く扱われるに過ぎず、大部分がサヨンとその友人、タイヤル族の子どもや日本人駐在員の日常生活を描いている。また、事件の理由を池でサヨンが遊泳をしてタブーを犯したことの祟りだとしている。この部分は、後述のタイヤル族の死生観を思わせる点で興味深い。また、タイヤル族の若者の勇ましさと忠誠心をアピールするために、先生を溪流で背負ったり、軍歌をうたって人柱になったりして渡している（清水 1943 [下村2007, 593-614]）。

表1 「サヨンの鐘」関連事項

年	月/日	サヨンの鐘に関連する事項	場所	備考
1922	01/18	サヨン・ハヨン誕生	リヨヘン社	
1933	04/03	豊田ヤエ子（兄ユーカー・ンハロの長女）誕生	リヨヘン社	情報提供者
1936	11/22	豊田一之（次兄バットの子）誕生	リヨヘン社	情報提供者
1937	08/14	台湾が戦時体制下にはいる	台湾	
1938	09/27	サヨンの遭難事故発生	南澳溪南澳	
	09/29	『台湾日日新聞』に事故の報道記事	台湾	物語の原型
	11/26	青年団葬	リヨヘン社	
	12/06	藤田俱治郎・台北州知事、サヨン墓参	リヨヘン社	

1939	01	藤田知事、サヨン墓参、歌を詠む	リヨヘン社	山地巡視
	10	藤田知事、教育所庭に「サヨン乙女の碑」建立	リヨヘン社	
	10	自助会が制定、自助会長を青年層から選定。頭目、副頭目、勢力者の自然廃止	リヨヘン社	
1941	02/20	皇軍慰問学芸会でリヨヘンの少女・松山ミヨ子らが「サヨン少女を想う」の歌を紹介する	台北市	
	04/14	長谷川清・第18代台湾総督が「愛国乙女サヨンの鐘」贈呈	リヨヘン社	
	05/14	長谷川総督『朝日新聞』インタビュー記事	東京／台湾	
	05(?)	渡辺はま子レコード化（西條八十作詞、古賀政男作曲）の申し込み。7月レコーディング	東京	
	08	村上元三「サヨンの鐘」劇本完成、11月上演、12月劇本発表	日本／台湾	
	08/07	佐塚佐和子（台湾コロムビア）「サヨンの鐘」をうたう	台湾	
	09	『理蕃の友』117号「愛国乙女サヨンの鐘」	台湾	
	09/27	「サヨンの鐘」の鐘楼除幕式	リヨヘン社	三回忌
	12/08	大東亜戦争勃発		
	01/29	演劇挺身隊・南進座と高砂劇団の共同出演試演会、紙芝居披露	台北市	
1942	03	高砂挺身報国隊（第1回高砂義勇隊）創設	台湾	
	04	長唄「サヨンの鐘」初演、6月木村富子「長唄新曲 サヨンの鐘」一杵屋勝太郎『国民演劇』	台湾	
	03	呉漫沙『愛国小説 莎秧的鐘』	台湾	南方雜誌社
1943	05	映画脚本『サヨンの鐘』（清水宏監督）	台湾	台湾時報
	07	呉漫沙著・春光淵訳『サヨンの鐘』	東京	東亜出版社
	07	長尾和男『純情物語愛国乙女 サヨンの鐘』	台湾	皇道精神研究普及会
	07	清水宏監督『サヨンの鐘』封切	東京	
1944		国民学校教科書に「サヨンの鐘」採録	台湾	総督府編
1958		リヨヘン全45戸が金岳部落に移転	台湾	
1976 [1980]	08	鈴木明『高砂族に捧げる』	東京	中央公論社

2. サヨンの事件をめぐる日本とタイヤル族

2.1 日本側の事情

さまざまな「サヨンの鐘」物語が有名になったことで、次第に事実があいまいになった。そこで、事実関係の確認がおこなわれてきた。その結論の1つとして、下村はサヨンの事件をリヨヘン社の関係者や蘇澳郡の郡守、台北州知事らの「同情を集めた」事件だったと見なした。しかしながら、藤田知事による墓参、「官に盡して一向に 犠牲となりにし 誠心を」という詩作、碑の建立という一連の行動が、ひとりの若い台湾原住民女性の事故への対応としては、あまりにも時間をかけた手厚いものだったと言えないだろうか⁹。長尾は、小説のなかで「サヨンは一度浪の上に浮き上がりました。二度浮き上がりました。肩の荷物を両手で差し上げるように見えました。荷物だけは助けたいという責任感からそうした」と記している（長尾1943, 110）。事件のことを父親から何度も聞いていたヤエ子さんも、両手をあげて「こうやって、こうやって、水の上に最後に手だけが残って。かわいそうで…」と伝え聞いている。その現場

に居合わせた道島巡査が、人道的な立場から3度激流に飛び込んだ（長尾 1943, 139-140）のは当然であろう。田北警手をはじめ日本人関係者も無念であったろう。しかし、統括責任者である藤田知事が、相当の危険を伴う冬の往復を含めて、極めて困難な道程を顧みずにリヨヘンにたびたび赴いたのは、尋常のこととは思えない。

収集した限りの資料等をもとに分析すると、次のようなことがいえる。まず、藤田知事は、タイヤル族の関係者に対して「配慮」すべき事情があった。タイヤル族は、1906年の時点で他の原住民が平定される中で「依然抵抗を続けて」いた「東部の険しい山岳地帯」の人々であった。警務局理蕃課も、「往時北部台湾にその武を誇った南澳蕃のリヨヘン社」（1941, 5）と記述している。すでに霧社事件から8年経っていたとはいえ、1937年から戦時下に入った台湾で、山深くのリヨヘンを発端に反乱が広まるのは避けられねばならなかったろう。しかも、長尾の記述から、サヨンの長兄ユーカーン・ハロは「頭目」であった。それが、1939年10月の自助会制定で伝統的な政治権力者がいなくなるのと同じ月に、「サヨン乙女の碑」が建立（長尾 1943, 169）されている点は注目したい。反乱させないためにも「日本人の事情」で起こった事件の発端から目をそらさせて、伝統的勢力を日本側に引き込み、新たな勢力にシフトしていくための説得には当然時間がかかった。そのために、統治責任者自らが赴いて説得を重ねることで、サヨン自らの愛国心がもたらした不幸へとすり替えていったのではないだろうか。

2.2 タイヤル族の死生観とサヨンの事故死

実は、死者となったサヨンに対するリヨヘン社青年団葬、墓参、哀悼、碑の建立という「日本的な」対応は、タイヤル族の伝統的な信仰や死生観と相いれない。李らによると、タイヤル族の伝統的な社会生活は靈魂ルトゥrutuxへの信仰が中心だった。超自然信仰・祖霊信仰の対象であるルトゥはタイヤル族の世界観をはじめ、人間生活すべての吉凶を支配した。ルトゥを敬ってその教訓を無条件に受け入れ満足させることが、人間の幸福につながる。一族は、ルトゥのために儀式を行い、連帯感を保ってきた（李 1963, 256）。タイヤル族は、祖霊であるルトゥとともに生活していたのである。

ルトゥは、人間が活着している間は血液中にいる。死を示す脈拍と心臓停止は、ルトゥの肉体からの分離による。死には、正常死プラカ・マオカン *plakə maxokən* と凶死ニアケ・マオカン *bniakex maxokən* がある。正常死者は、死後ルトゥが善霊となる。その場合には、日本統治以前は生前に寝ていた室内の床下に埋葬された。しかし、凶死者はルトゥが悪霊となって災いをもたらすと恐れられ、死んだ場所に放置され親族は葬儀を行わなかった。凶死には、a. 難産死、b. 殺害、c. 溺死、d. 墜落死、e. 蛇や野獣に噛まれての死亡、f. 山崩れによる圧死、g. 自殺などがある。李らは、1960年代初頭においてキリスト教の普及で信仰も変わりつつあったが、まだ伝統的な死生観が混在する状況であったとしている（李 1963, 99-100）。リヨヘン駐在所勤務経験のある平野氏は、「一体に古い人々は死人の霊を慰めるという観念はうすいと思います、昔は死後は鬼になると考へていました。鬼はおそろしい神の意味です」と答えている（1943, 146）。これは、凶死者に対する扱いを意味する。また、警務局理蕃課の調査資料でも「高砂族は迷信上重病者に対して接近は極度に嫌う風習がある」（1941, 6）と記されている。のみならず、長尾の小説において、田北警手が弔意を述べた際、サヨンの次兄バットが「いいえ先生の罪ではございません。サヨンは魔の神がさそったのでありましょ」と答えているのである（1943, 113）。サヨンの兄ですら、事件発生時はサヨンを凶死と見なしていたと考えられる。

タイヤル族の死生観や慣習にのっとれば、サヨンの遺体を搜索することは忌避されるべきであったし、むしろ遺体は出てこないほうが好都合であったはずである。一連のサヨン弔いの行為は、この事件をきっかけに日本側が、日本人の死生観や弔いの習慣をタイヤル族の人々の間に根付かせようと意図したものだったのかも知れない。長谷川総督が鐘を贈呈するときに、サヨンが生前、「常に能く親に仕えて孝養を尽した」点もたたえている（警務局理蕃課 1941, 8）。日本側は、タイヤル族の伝統に反したサヨンの忠孝を規範として称えたのだが、日本側もタイヤル族がサヨンの凶死をルトゥへの裏切りと見なしていると把握していたのではないか。

一方、青年団あげての搜索や葬儀という日本式の弔いをし、神棚にサヨンの霊を祭ることで、サヨンの一族はルトゥからの災難を忌避できたともいえる。凶死したサヨンを「愛国少女化＝神格化」することは、一族の平穏のためだったともいえる。そうであれば、次兄バット・ハヨンが総督公室で行われた表彰式に女子青年団長松本光子とともに臨み、「サヨンの鐘」を受け取ったのは、日本の宣撫に従ったからだ単純に見なすことはできない。表彰式は、ルトゥとなったサヨンを一族から青年団中心のリヨヘン共同体へと公的に引き渡しをする意味も持っていた。事実、翌1939年リヨヘンには自助会が制定され、青年層から会長が選定され、「頭目、副頭目及び勢力者も自然廃止された」（長尾 1943, 186-187）。そして、長尾が訪問した事件数年後には、サヨンの生家であるユーカーン・ハロの家には神棚が祭っており、その左に「故サヨン・ハヨンの霊」と記した白木製の位牌があった（1943, 541）。こうして、サヨンのルトゥはリヨヘン共同体を見守る「新たなルトゥ」として生まれ変わったのである。

2.3 少女たちにとっての事件と「サヨンの鐘」

では、1940年2月20日の皇軍慰問学芸会で、《サヨン少女を想う》をうたったりヨヘン社の少女たちは、事件をどのように受けとめたのだろうか。この歌は、当時リヨヘン教育所に勤務していた平野教師が作った歌を「蕃語に訳したもの」を松山ミヨ子さんがうたった（長尾 1943, 140-141）。ミヨ子さんは、長尾の小説で口琴の名手としても描かれており、後に教育所の教師になってヤエ子さんにサヨンの踊りを教えている。歌詞を見ると、「サヨンサン」「センセイ」のみの単語が日本語で、後はタイヤル語である（長尾 前掲, 115-116）。青年団教育によって日本への愛国心を植え込まれたミヨ子さんが、事件の伝道を担ったわけである。サヨン水難現場に居合わせた17歳のミヨ子さんにとって、友人・サヨンの事件はいたたまれないものであったと想像される。《サヨン少女を想う》は日本人教師に押しつけられたものであったかも知れないが、伝道者となることでミヨ子さんが自らの気持ちを整理していったであろう。

「サヨンの鐘」表彰式に出頭した光子さんも、遭難現場に居合わせた一人であった。長谷川総督が故人サヨンを称えるだけでなく、「青年団員修養の資」として鐘を贈呈したことによって、サヨンを救えなかった自責の念から逃れられたのではないだろうか。リヨヘンの「サヨンの鐘」の音は、少女らの心を癒すものとして響いたのではなかつただろうか。

以上のように、日本側は、遺体が発見されず荷物だけが発見されたことを愛国少女サヨンの賛美に利用した。愛国少女化は、タイヤル族にとっても、日本側に従いつつ古い習慣をうまくかわすために都合がよかった。そして、日本とタイヤル族の中間にいたミヨ子さん、光子さん、それに続くヤエ子さんらタイヤル族の若い女性たちは、《サヨン少女を想う》や《サヨンの鐘》をうたって事件の伝道師となることで、自分たちの居場所を確保していった。そして、「サヨンの鐘」はリヨヘンのルトゥとなったサヨンとともに、青年団と中心とする新しいリヨヘン

共同体のアイデンティティを見出す音として響いたのである。そのリヨヘンとは、どのような場所だったのだろうか？

3. サヨンの鐘の鳴るサウンドスケープ

3.1 リヨヘンへの道のりとその音

サヨンの事件の頃のリヨヘンまでの行程とその音環境を知る手掛かりとして、数年後にリヨヘンを訪ねた長尾和男による作品（1943）のうち、特に「リヨヘン探訪記」の部分の記述が参考になる。以下は、そこから音の記述をすべて抜き出したものである。音の記述により、その場所のイメージが明確に伝わってくる。

リヨヘンへの旅立ちに際して、長尾は「リヨヘンと言えば山又山の其の又山奥の、桃源郷を連想させられる。その、俗界からずっと遠ざかった、憧憬の仙郷リヨヘンへ！桃源郷リヨヘンへ」と記している¹⁰（下村 2007, 499）。当時、リヨヘンに行くためには、台北から汽車で宜蘭線の終点である蘇澳に行き、そこからバスで臨海道路を2時間走って大南澳、さらに西へ9里（約35.3 km）の徒歩という道程であった。リヨヘンは、標高3700尺（約1121 m）の雑木林に囲まれた南斜面に位置する昔ながらのスレート造りの村であった（警務局理蕃課, 1941, 5）。時代は下るが、1960年代作成の地図（図1）で確認すると、大南澳は蘇澳とリヨヘンのおおよそ中間地点にある。大南澳からの約35.3 kmは距離も相当であるが、徒歩でしか行けないほど険しい山道であった。以下、長尾の記述と地図を見比べながら道程で耳にした音を追ってみる。なお、引用に際して、旧仮名づかいや旧漢字は現代の用語法になおした。また、引用箇所の後ろで（ ）内に記したのは、長尾（1943）のページ番号である。

しばらくは白い埃の道である。相思樹の並木路である…水田には田植えが終わり、水が溝をごろごろと流れている…田には白鷺が遊んでいる…後方からは娘の歌謡がきこえる。甲高い聲が段々近づいてくる。みると、水牛車をひいている（149）。

通過した集落は水の豊かな農耕地で、人里に住む鳥や家畜、女性の歌声など生活に密着した音風景が広がっていた。5, 6町（約0.54 km）歩いたところで、南澳の駐在所から1里半程（約5.88 km）奥まで行くという製糖会社の貨物自動車に乗せてもらう。

河原の中の道なので車がおそろしくゆすぶる…うっかりすると頭をぶちつけそうになる程、はげしい動揺がした。車は、突然河原を横切ったところで停まった。前に流れがあり、流れの左側の岸に碑石が建っている。「愛国乙女サヨン遭難の地」の十一文字が刻んである。碑石の左側には、「昭和13年9月27日遭難」と刻してある。流れの上に丸木を横にならべ土橋となっている。この地はペヤウと呼ばれ、この溪流は大南澳溪南溪といわれる（150-151）。

山に向かう道は、川沿いに走っていることがわかる。図1で確認すると、現在のサヨン記念公園が武塔村あたりなので、サヨン遭難の地は川の支流と道が交差した地点Aあたりだろうか。こうしてみると、あとわずかで大きな集落に抜けるという場所である。再び自動車に乗り、クビヤハンという地点で降ろされる。

ここから溪谷を左にとり、牛もかよわぬ、細い道をたどるのである。道は谷に沿い、山の中腹を削りって人がようやく通れるだけのものである（152）。

「牛もかよわぬ」という表現に、長尾の心細さが表れている。しかし、ここから先は徒歩での移動だということもあって、たくさんの音の記述が見られる。

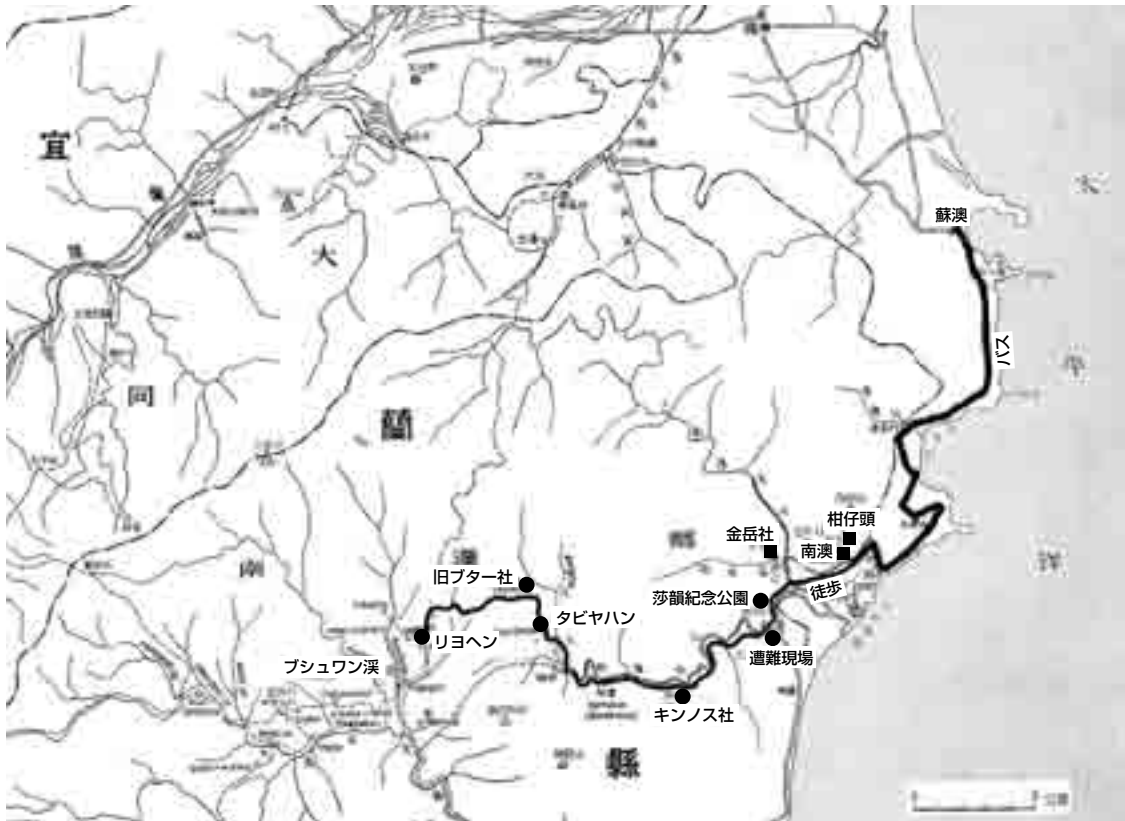


図1 サヨン関係地図（李 1963, p.5 をもとに作成）

草の中一面に虫の音がする。内地の秋の野を偲ばせる虫の声である（154）。

ちなみに、長尾は台南州立農業学校の教諭をしている。今回は、依頼者である白川と同行しての旅行である。「内地の野を偲ばせる」という表現は、初めてのこの地に意外と親近感を感じたことを示している。

この後、担いだ筥を引き換えに南澳に買い物に行くという「お山の」青年や籐を首にかけて山を下りる青年とすれ違っている。タイヤル族は、意外と往来しているようである。

しばらく歩いて峠の頂へ来ると、眼界が急に開けて、見下ろすかなたの山腹には、キンノス社が望まれる。すぐ眼の下数百尺の断崖の下には、せんせんたる清流が音高くながれている。峠であるから、小鳥の音が相当に喧しく聞こえる（155）。

キンノスは元々、ここから少し離れた奥に居住していたが、「水田の耕作の関係で、現在の所

へ移住した」とあるので、ここでいうキンノス社は図1の右側にあるキンノスのことである。ここで、リヨヘンから来た郵便配達夫と会っている。下から持ってくる郵便とここで交換するという。「上をみても下を見ても身の毛もよだつような恐ろしい」断崖絶壁を過ぎると、

山の上から嵐のように蝉の声がしだした。全山蝉聲満つとでも形容すべき様子である。涼しい風が谷間から登ってくる (158)。

蝉の声といえば猛暑という日本の夏の音風景とは異なるようである。ようやくブター社を遠望する。ここからリヨヘンまで「もう2時間あまり」というところであるが、「一步あやまれば千の谷底」という岩山をえぐってつくった栈道を進む。半里進むと、ブター社にはいった。

ブター社で始めて鶯を聞いた…鶯の声は、心耳を洗ってくれるに十分である (162)。

すると、「雨がきた」と誤ったほどの清流の音がした。

雨声のような谷の流れの音が喧しく鳴っている深い谷間も通った…苔むした岩の割れ目を伝って清水がせんと流れている…森閑とした深山幽谷である…小鳥の囀る声がこの深い深い谷間にこだましている (162)。

「深い深い谷間」にこだまする小鳥の声とは、人間の手の届かない神聖な響きであったのかと察せられる。そうした超自然的な音とガイド役として同行していた娘たちによる聴きなれた《サヨンの鐘》の歌が、共に「森閑とした谷間に反響」したのである。それは、あたかも先祖(の使い)と生きている者との音によるコミュニケーションのようではなかっただろうか。

こうして見ると、リヨヘンまでの道のりで長尾が記しているのはそのものが珍しい音というよりは、これまで耳にしたことのある音が山奥の地形で独特に響いている様子である。その代表が、「内地の秋の野を偲ばせる」と表現する蟲の聲である。台湾で長年暮らしてきた長尾にとって、意外にもなつかしい種類の音を桃源郷で耳にした。ところが、その響きは草一面に広がったり、高い音をたてたり、嵐のようにひびいたり、谷間にこだましたりして聞こえた。また、そこは種類ごとにはっきり音が聞き取れるハイファイな音空間を形成していた。このように、長尾はその空間でしか聴こえない響きのする音、まさにその場所のサウンドスケープを記述したのである。

3.2 リヨヘンのサウンドスケープ

桃源郷とイメージされていたリヨヘン社を舞台とする小説の部分では、「どどどど…という春雷のような山鳴の響きがどこかの山でしました」という、「春のうらかな空気をゆすぶる」不気味な音の記述も一か所ある (11)。しかし、実際訪れてみると、人の生活を感じさせる場所であった。長尾は、数町はなれた山の中腹にあるサヨンの墓地に参る。すると、「お経をあげてくださる方もあります」と部長さんに言われる。長尾以外にも、日本人かの何人が墓参していたようであった。さらに、石段を何段も登って、社の中ほどより少し上方にあるサヨンの生家に辿りついた。石段に整然と並ぶ家屋は、殆ど同じ形、同じ大きさだった (以上、168)。

このように、リヨヘン社は人の手の入った文化を感じさせられる空間であった。

リヨヘンの音については、小説の部分で描かれている。それらは、①自然の音、②動物の声、③人の歌や楽器演奏の音、④伝説の音に分類できる。①の事例としては、

晩の給桑を終わったサヨンは、戸口に立って空模様ばかりみている。そのうちに夜になると、大粒の雨が風に吹かれて戸口へざあざあつと打ちつけて来ました (90)

これは、雨音の描写であるため「自然の音」とした。だが、「ざあざあつ」という音は大粒の雨がタイヤル族の伝統的家屋（図2参照）にあたった時の音である。長尾はサヨンの生家について次のように描写している。

屋根には神社の千木のような木が出ていた。壁は全部、薪のような丸木を割ったものを積み重ねてある。屋内は、そんなに深くはないが、三四尺程掘り下げてある、だから、入口からは三四段の階段を下りて中へ入らなければならない (168-169)。

発音源としての雨音は自然の音であるが、伝統的な家屋にあたったその響きは、タイヤル族の人々の文化の音といえる。

②の事例としては、

社の人たちは時計を使はわないで鶏の鳴聲で時を知ります。二番鶏は午前4時になき、一番鶏はそれよりも早く鳴きます (16)

社内の犬が何に驚いたかわんわん吠え立てました (17)

があげられる。リヨヘンでも鶏や犬が飼われていたことがわかるが、当時の日本国内の田舎の生活と重なる生活音でもある。その点で、長尾にとっても読者にとっても身近な音だといえる。

③の事例は、

サヨンのうたは、窓の外に月光に照らされてるリヨヘンの谷間谷間へ流れてゆく (44)

口琴の哀音が、庭の向こふの月光の中から嫋嫋とひびいて来ました。秋の月明の夜の叢の中にすだく蟲の音を伴奏として、高く低く綿々とつづくのでした (47)

があげられる。サヨンの歌声や口琴の音は、月光の中で響く設定となっている。実際に、長尾がタイヤル族の女性がうたうのを聞いたのは、1つ手前のブター社からリヨヘンに向かう道すがらであった。

雲が、樹々の間を流れているのが見える。娘たちは声を揃えて西條さん作のサヨンの唄を歌い始めた…森閑とした谷間に唄は反響して行った…霧雲が、すぐ前方の樹間を流れた。煙のようにももの凄く雲が流れてすぎた (160-165)。

雲より高いところで谷間に反響する声も幻想的であるが、自然の力のほうが勝る状況でもある。長尾がここでサヨンと月光をセットにしたのは、ロマンチックでありながらも、実在したサヨンの姿を描きたかったからかも知れない。

口琴については、長尾が「昔から伝わっている笛などはありませんか。」と南澳駐在所の平野さんに尋ねたとき、次の回答を得ている。

ロボというのがあります。竹片に細長い穴をならべてあけて、真鍮の弁をはめこみ、この竹から紐をひき、この紐をピンピンと引っばって、吹くのです (144)。

この説明は1弁のものであるが、黒澤はタイヤル族の口琴ロボ roboは1弁のものが普通だが、8弁のものまで記録にあるとしている (李 2008, 138)。「月光の中から響く」という小説の中でこの表現は、ロマンチックな異国情緒を醸し出すものになっている。

④の事例は、次のとおりである。

…石の中に地上の大洪水から逃げてきた一人の男と一人の女が隠れていました。その隠れている事を知っているのは、一羽の鳥と、一羽のシシレック (目白に似た鳥) とだけでした。なぜならば、カラスとシシレックは不思議な力をもった鳥だったからです。鳥とシシレックはそれから、毎日この石の上にとんで来ては、熱心にお祈りを始めました…シシレックのお祈りは一層熱心でありました。その効果があらわれたものか、或日、轟然と大きな大きな天地も崩れるような物音がして、石がふたつに割破し、二人の人間がうまれて来ました…今日のタイヤルの祖先がこれであると申します (38-39)

「シシレックという鳥ね。鳴き声によって、旅や猟に出る時の吉か凶かを占うと申しますね。その鳴き声はどんなに違うのでしょうか。」…「シシシ……と長くひっぱる時は吉ですし、デイ……ときれぎれに鳴く時は凶だそうです。」 (41)。

前者はタイヤル族のいわゆる創世神話、後者は鳥の聞きなしである。いずれも、シシレックの祈り=鳴き声が大きな役割を果たしているといえる。ここで、「洪水」「旅や猟に出る時の吉か凶」をあげているのは、サヨンの事件を暗示するかのようである。シシレックは、先にあげたタイヤル族の死生観とも関わっているようである。果たして、サヨンは事件の日にシシレックの「とぎれとぎれ」の鳴き声を聞いたのだろうか。サヨンらが出発したのは午前5時とされているから、二番鶏も鳴き終わった時間である。シシレックのデイ、デイという声も谷間に反響していたのかもしれない。

なお、物語の設定では、教育所の先生とサヨンたちとの会話になっている。長尾は、橋本部長、永田先生、篠原医務担当医、女子青年団長・松本光子さん、教育所の松村ミヨ子先生、サヨンの次兄バット・ハヨンさん、平野勇吉さん (ユーラオトール) らと夕の会を開いて、サヨンにまつわる話を聞いている。また、夜にはリヨヘンからさらに奥のハガバリシ社の4人の女性と南澳社の女性一人を招いて、「お山の事情を更に色々」尋ねている (548-550)。これらを通じて、シシレック神話に関する情報収集も行われたものと思われる。

以上のように、長尾が描写したりヨヘンのサウンドスケープは、共同体の生活に密着した文化的な音であった。サヨンは、かつてそのサウンドスケープの中に実在した。そして、ヤエ子さんたちも1958年までそこで生活していたのである。

なお、小説は「サヨンの鐘」の響きで終わっている。

墓前に語りあう乙女たちの耳にやがて「夕べの祈願」を知らせる鐘がきこえてきました。聖鐘は跪づいて一斉に祈願をささげる乙女たちの上を流れ又りヨヘンの峰に谷間に木霊してゆくのでした (124)。

長尾は、「鐘楼がある。中に写真でみた鐘がつってある」と記述しているように、教育所の庭を訪れてサヨンの鐘を見ている。しかしながら、鐘の音を聞いたという記述はないのである¹¹。

「サヨンの鐘の音」は、確かにりヨヘンの空間に響いた標識音であった。金岳社区発展協会によると、総督から贈られたサヨンの鐘は、「部落の古老が、祭事のときや、登下校の合図、また重要なことがあるときに鳴らした」といい、部落の古老の歴史的記憶や生活経験そのものとなったという (図2説明文、岡部芳広訳)。サヨンの物語がりヨヘンの外に普及し、脚色が加わった一方で、鐘そのものはりヨヘンという音響共同体の音として、特別な時だけに鳴り響いていた。しかしながら、それは当時訪問した部外者である長尾にとって、伝説の音に過ぎなかった。

4. 「サヨンの鐘」の再創造にむけて

4.1 「サヨンの鐘」の喪失

金岳社区発展協会の説明によると、「サヨンの鐘」はりヨヘンからの移住の結果失われたとされている (図2説明文)。「愛国乙女サヨン遭難の地」と書かれた古い碑石だけが残り、莎韻記念公園からほど遠くない道路沿いに移転されている。戦前、日本と台湾の両方で人気を誇ったサヨンの鐘が、移住のために置き去りにされたとは考えにくい。典拠は不明であるが、「第二次世界大戦後、台湾に移ってきた国民党政権によって、日本の台湾統治の象徴のひとつであるこの鐘は撤去され、碑も碑銘を削った上で廃棄された」とある (「サヨンの鐘」『ウィキペディア』, 2012年9月6日検索)。いずれにしても、ヤエ子さんたちのアイデンティティのよりどころであった「サヨンの鐘」とその音は喪失し、資料のなかの写真としてしか残っていないのである。

4.2 莎韻記念公園の「サヨンの鐘」



写真2 莎韻記念公園の莎韻の鐘

現在、武塔駅から300メートルほど行ったところに莎韻記念公園がある。観光地・花蓮へとつながる国道9号線からも近く、観光バスも停車できる。ここには、音の出る「莎韻の鐘」(写真2)が設置されている。この場所に設置されたことで、「サヨンの鐘」物語は再び脚光を浴びている。後者からは、学校のチャイムとしても使われているビッグベンの音に続いて、胡美香 (1926- 和歌山生まれの中国人)

がうたう日本語の《サヨンの鐘》と蔡琴（1936- 台湾出身）がうたう中国語版の《月光小夜曲》が流れる。それぞれ3分50秒強の長さであり、歌の部分だけでも計7分40秒ほどになる。公園の近くに住む曹さんによると、この音は毎日、朝8時から夕方6時までの1時間ごとに鳴るという。しかし、これは音の出る装置であっても鐘とは言えない。YouTubeへの投稿を見ても、観光客は音の出る「莎韻の鐘」から流れる「聞きなれた」鐘の音そのものに対してではなく、「サヨンの鐘」物語を想起させる《サヨンの鐘》と《月光小夜曲》の歌に関心を向けていることがわかる。

ヤエ子さんたちは、《サヨンの鐘》や《月光小夜曲》を否定しているわけではない。長谷川総督による「サヨンの鐘」の贈呈後も、タイヤル族の少女らは《サヨン少女を想う》をうたい、ヤエ子さんもミヨ子さんに教わった「サヨンの踊り」を台北で披露した。その後、ことあるごとに《サヨンの鐘》や《月光小夜曲》をみんなであうたっており、ヤエ子さんも一之さんもヒロコさんも、完全に覚えていてうたうことができる。「サヨンのおかげで」とヤエ子さんが言っていたように、台北にも日本にも行かせてくれたサヨンを誇りに思っている。彼らにとって、愛国少女化されたサヨンを強調することは、サヨンとの関係を保つことにもなり、自らのアイデンティティを示すことにもなった。事故当時幼かったヤエ子さんは事情を知らなかったであろうが、結果として日本流に手厚く哀悼されることで、サヨンは通常の死者と同じように親族とつながり続けたのである。

4.3 サウンドスケープとしての「サヨンの鐘」再創造に向けて

1995年の創設以来地道な活動が続け、1997年にはリヨヘンの旧集落の調査を行った金岳社区



図2 金岳の莎韻の鐘

發展協会によると、「リヨヘンがサヨンの故郷だということを知る人は多くない」という。そこで、2008年「サヨンの子孫」の名のもとに、金岳の「莎韻の鐘」を建立した。また、昔の部落の歴史文化とサヨンの物語を語り継いでいくために、「伝統的な小屋」とあわせて、「サヨン物語館」を整備した（以上、図2の説明文、岡部芳広訳）。「サヨンの鐘」を復元した。

金岳の「莎韻の鐘」については、もう少し実証的な調査をする必要がある。だが、これが精巧に「サヨンの鐘」を復元した鐘であるとしても、サウンドスケープの原風景から切り離されている限り、リヨヘンの標識音として「サヨンの鐘」とはならない。喪失されたのは、「サヨンの鐘」だけではなく、リヨヘンのサウンドスケープそのものであったからである。「共同体の記憶」の音としての「サヨンの鐘」を後世に伝えるためには、リヨヘンのサウンドスケープ

を再創造しなければならないだろう。そのためには、当時のリヨヘンでの生活や文化に関わる音を収集したり、再現したりして音の素材を集める作業を行ったりして標識音をつくることも考えられよう。自然音を再現するためには、リヨヘンにマイクを設置して、リアルタイムに送ることもできよう。

本論は、「サヨンの鐘」の音楽学的研究の出発点である。次の課題としては、「サヨンの鐘」を鐘の音のサウンドスケープという観点から考察することを考えている。そのために、莎韻記念公園の「莎韻の鐘」および金岳の「サヨンの鐘」について、実証的な調査を行いたい。また、本研究を進めるうちに、タイヤル族の音楽と世界観の関係にも関心が高まった。山田は、民族音楽学の立場から、「人間と音環境の間の相互関係」に注目することの大切さを説き、その実践例としてスティーブン・フェルドの研究をあげている（山田 2000, 8-10）。タイヤル族の音楽をリヨヘンの自然との「相互関係」という観点からとらえ、その本質性を理解するとともに、「サヨンの鐘」の未来について、タイヤル族の人々とともに考えていきたい。

【参考文献・資料一覧】

- 木村富子 1942「長唄新曲 サヨンの鐘—杵屋勝太郎」『国民演劇』2-6, (ページ番号不明). 下村編 2007, pp.589-590.
- 警務局理蕃課 1941「愛国乙女 サヨンの鐘」『理蕃の友』117, pp. 5-8.
- 黄宣衛編 2012『人類学家的足跡—台湾人類学百年特展』中央研究院民族学研究所博物館.
- 呉佩珍 2008『「サヨンの鐘」神話の解体—真杉静枝『リオン・ハヨンの谿』と『ことづけ』を中心に—』『社会文学』27, pp. 156-18.
- シェーファー, マリー 1986 鳥越けい子・小川博司・庄野泰子・田中直子・若尾裕訳『世界の調律』平凡社.
- 清水宏 1943 映画シナリオ「サヨンの鐘」『台湾時報』5月号, (ページ番号不明) 下村編 2007, pp.593-614.
- 下村作次郎編 2007 『「サヨンの鐘」関係資料集』緑蔭書房.
- 下村作次郎 2007「下村 (2007, 637-639) 解説」 下村編2007, pp. 635-652.
- 鈴木明 1980『高砂族に捧げる』中公新書.
- 谷村晃・中川真 2004 聞き手: 土田義郎「古今東西鐘音展望」『サウンドスケープ』6, 3-12.
- 長尾和男 1943『純情物語愛国乙女 サヨンの鐘』 下村編2007, pp. 353-566.
- 原田大輔 2010「HP 別稿『「サヨンの鐘」によせて—「サヨンの鐘」資料一斑—』参考資料」九訂稿<http://home.hiroshima-u.ac.jp/tatyoshi/sayunbunken.pdf> 2010年11月2日(火)作成
- 渡辺はま子 2011『オリエンタル・デラックス』COCP-36677, 日本コロムビア.
- 松山虔三 1944「リヨヘン」『民俗台湾』4-9, (ページ番号不明).
- 村山元三 1941「サヨンの鐘 (一幕)」『国民演劇』1-10, (ページ番号不明). 下村編 2007, pp.569-586.
- ピーティアー, マーク 1996 浅野豊美訳『植民地—帝国50年の興亡』読売新聞社.
- 山田陽一 2000『自然の音・文化の音—環境との響きあい』昭和堂.
- 楊南郡 2005 笠原政治・宮岡真央子・宮崎聖子訳『幻の人類学者 森丑之助』風響社.
- 李嗣涔 2008『戦時台湾の声音 1943 黒沢隆朝「高砂族の音楽」復刻』台大出版中心.

李亦園・徐人仁・宋龍生・吳燕和 1963『南澳的泰雅人一民族学田野調査興研究』上冊 台北：中央研究院民族学研究所。

Kaneko, Erika 2009 “Glimpses at the Other World: Traditional Mortuary Practices of the Atayal”, David Blundell ed., *Austroonesian Taiwan: Linguistics, History, Ethnology, Prehistory*. Taipei: Shun Ye Museum of Formosan Aborigines, 246-281.

Shimizu, Jun 2009 “Japanese Research on Taiwan Austronesian-speaking Peoples”, David Blundell ed., *Austroonesian Taiwan: Linguistics, History, Ethnology, Prehistory*. Taipei: Shun Ye Museum of Formosan Aborigines, 183-245.

¹ タイヤル族は、現在台湾政府が原住民と認めている14の民族集団の1つである。最初から1つの集団を形成していたわけではなく、類似の文化的特徴をもつ比較的近隣の集団を1つのまとまりとして同定されてきた。こうした台湾原住民の社会と文化に関する統合的な研究は、日本植民地統治に始まった（黄編2012, 楊 2005, Shimizu 2009）。タイヤル族は、タイヤル Taiyal 族（またはアタヤル Atayal）とその亜流であるセーディック Sedeq からなり、後者はさらにセレッツ Seqoleq とツェォレ Tsole に分かれる。南澳のタイヤル族は、1931年の統計ではセレッツのさらに亜流のカナ・ハウル kana-xaqul 人が250戸、ツェォレの亜流のマバーラ məbəala 人が220戸、同メネボ mənebo 人が40戸、セーディックの亜流のタウサ tausa 人が90戸、計633戸あったとされる。1899年の森丑之助による調査記録では、南澳15部落のうちのひとつと数えられ、マバーラ系統とタウサ系統の人々が住んでいたとされるタイヤル族の集団移住は戦後も続き、1960年代初頭までに平地にある南澳村、東岳村、碧候村、金岳村、武塔村、奥花村、金洋村、寒溪村、大進村に分かれて生活するようになっていた（李 1963, 5-14）。黒沢隆朝は、1943年「高砂族の音楽」の収録の際、同じタイヤル系統の人々でも「通訳がなければならなかった」と驚いている（黒澤 2008, 140）。なお、台湾では1997年以降、原住民が正式名称となっている。

² 張准教授らの話によれば、戦後の台湾では、リヨヘンの青年という恋人がいたにもかかわらず日本人教師に恋心を抱いた莎韻が、その出征に際しての荷物運びで水難事故の犠牲となったという話として伝わっており、中国語版《月光夜曲》はそのテーマソングだという。

³ リヨヘンへは、出版元である皇道精神研究普及会の主宰者・白川恵富と同行している。長尾本人は、当時、台南州立台南農業学校の教師であったが、戦後は未来派の詩人として知られた（下村 2007, 646）。なお、同化主義の考え方には官僚的な「形而下同化」を批判し、日本からの農業移民と台湾人が隣人として生活する「融和同化」を推進しようとした持地六三郎（ピーティ 1996, 138）の思想もあった。長尾もこれに影響されていたのかも知れない。

⁴ サヨンの生家である長兄ユーカン・ハロの家を訪れたとき、炉の近くの床で寝ている子どもを描写している。この「水で頭を冷やして布団を来て寝ている」ハロさんの8歳の娘（長尾 1943, 170）というのが、当時のヤエ子さんのことだと思われる。

⁵ 『台湾日日新聞』では11名とされているが、長尾はサヨンを含めて8名のタイヤル族の青年たちの名前を記している（下村2007, 468）。豊田ヤエ子さんも「8名だ」と述べていた。

⁶ ただし、下村がその来源となったであろう資料とする『理蕃の友』の記事（警務局理蕃課, 1941）を下村の年表（2007, 648-651）と比較すると、①サヨンが四女となっている（下村：兄

二人、姉5人)、②教育所卒業年が1935年となっている(下村:1933年)③サヨンが丸木橋をわたったのが3人目(下村:2人目)、④藤田知事が12月6日にリヨヘンを訪問した翌日に歌を詠んだことになっていたり(下村:翌年1月)など、異なる点が見られる。

⁷ 佐塚佐和子の《サヨンの鐘》は、今のところ音源を入手できていない。佐塚は霧社事件で殺害された佐塚警部と台湾原住民の母の間に生まれた娘で、事件の後、新渡戸稲造が仲介して東京の音楽学校を卒業した。本人が所有していたレコードは、東京空襲で喪失された(鈴木, 1980, 129-130)。

⁸ なお、映画は松竹、台湾総督府、満州映画協会の製作、清水宏監督、出演は李香蘭、近衛敏明、大山健二、音楽は古賀政男が担当している。映画の中で李香蘭がうたう《サヨンの歌》は、同じく西條八十作詞、古賀政男作曲であるが、サヨンが亡くなった後に哀悼する《サヨンの鐘》とは別の曲である。鈴木によれば、当時は主演の李香蘭の演技力の高さが認められたものの、「サヨンの生活の裏付けがない」「まとまりのつかぬ作品」と高い評価を受けなかったようである。また、撮影は霧社で行われている(鈴木 1980, 119)

⁹ 11月26日に青年団葬が行われたのは、「搜索が付近の蕃社総動員で一カ月続いた」という長尾の記述(1943, 140)と矛盾するものではない。

¹⁰ 旧漢字や旧かなづかいは、断りなく現代的な用語法に改めて表記している。

¹² 長尾が鐘の音を聞かなかったということは、当時リヨヘンの人々が鐘を目的以外では鳴らさなかったことの証ともいえる。

¹³ 鈴木は撮影をした松山氏と1970年代に面会しているが、このときのフィルムは戦後台北に進駐していた米軍に没収されたという(鈴木 1980, 32)。